



「今日は火曜日だけど、どう？私のおごりで駅前で軽く飲まない？と可愛く誘ったが、理恵は

、
「ごめん、美雪、今日はデートがあるの」
「えっ！理恵、私たちに黙って男の人ができたの〜？」
「ううん〜まああ〜」
「へえ〜それで社内の人？」
「ううん...」
「もう！じれったいわ、誰よ理恵」

理恵はその質問に返事せずしきりに腕時計を見て時間を気にしている。あや子が、
「美雪、その話は私がするわ、私も今晚がアルバイトあってお酒は付き合えないけどお茶なら...」

美雪とあや子はフラワー本社からなるべく遠い喫茶店まで歩いて行った。

「美雪、理恵は今日もアルバイトなの」
「えっ、さっき理恵はデートだって言っていたわ」
「そう、デートだけどアルバイトなの」
「へえ〜？？？」
「美雪はまだ処女でしょう、その美雪にこんな話聞かしたくないけど〜」
「まさか、デートクラブで売春？」
「少し違うけど〜援交なの〜」
「援交？まさか〜援助交際？」
「ほら、よく街でティッシュ配っているでしょう、テレホンクラブの」
「そ、それで...」
「それで、電話でお金の話がついたらデートするの」
「電話だけで、顔も見ないでセックスをするの？」
「美雪、よく聞いてね。私も理恵も借金が二百五十万円ほどあるの、月々利息だけで十万円ほど支払っているの、その他に飲代やショッピングの支払いの請求が毎月毎月追いかけてくるの。私たち二人とも手取り十七万円ほどしかなくこれを払うとお金が一円も残らないから、それで理恵は援助交際を始めて月々の生活費を稼いでいるの」
「すごい話になってきたね、あや子」
「そう、すごい話なの、それで美雪は今借金はいくらあるの？」
「ほらあのAAFクレジットの五十万円だけ」
「でも、今日もらったカードがあるでしょう、それで百万円になったわ」
「ああ、これ！でも限度額は三十万円と書いてあるし」
「美雪、そんなの嘘、一回目の入金の後すぐに電話がくるの、審査の結果限度額を五十万円まで変更いたします。カードは手続きなしでそのまま使えますと」
「そうなの〜AAFも最初はキャッシングは二十万円だったけど今では五十万...それにしてもあ

や子はよく知っているね」

「そらそうよ～今までフラワーをやめた人で、寿退社以外の人達の大多数はこのカード地獄での退社よ...」

「どうして会社やめるの？」

「そうね、退職金目当て、やくざの脅かし、ソープやヘルスへのトラバークなどいっぱいあるわ」

「そうなの...それであや子のアルバイトは？」

「祇園のクラブでホステス、火木土とお店に入って時給千五百円で月十万円ほどになるの、それで借金の利息だけ払っているの」

「月十万円も払って、利息だけなの？」

「そう、だからサラ金地獄、カード地獄と言うのよ」

「初体験」

美雪は、せつない気持ちであや子と別れて大阪方面行きの電車をホームで待っていると後ろから「奥本さん」と呼ぶ男性の声がしたので振り向くと、同じ経理部の課長が笑顔でベンチの横に座れと合図している。この課長は美雪のコンピュータ室とオフィスは違うが名目上は美雪の直属の上司になっていてフラワー本社では最後の独身組で古手のOLの間では超人気にはなっているが最近では浮いた噂一つなかった。この課長は尾上竜一三十三歳でかつて理恵と付き合っていた事があると理恵からは聞いていたが...尾上は、

「たしか奥本さんは向日町だったね」

「はい、そうです」

「そうそれなら俺も向日町で降りるから居酒屋でも軽くどう？」

「はい、ありがとうございます」と軽めに返事したのは、理恵とあや子の話を聞いたあとで少々気が滅入っていたからだ。

「本当に誘ってよかった」と尾上は頭をかいていた。尾上はまさかこんな時間に偶然にも社内でナンバーワンの美人にお近かずきができるとは思わなかったと電車内でもしきりに照れている。二人は駅から五分ほど歩いた割烹料理店の座敷で乾杯をしようとしていた。

「課長、何に乾杯します」

「そうだな～そう前田さんの友達とこうして飲めることに乾杯をしよう」

「前田さんって、理恵のこと？」

「そうだ！俺の元婚約者の理恵だ」

「そうなの～やっぱりあの噂本当だったんだ～」

「噂でなく真実と言うんだよ奥本君」

「いや～課長ってケッコウおもしろい～」

「奥本君、俺を酔わすともっとおもしろいで～」

理恵は今ごろ見知らぬ男とラブホテルのベッドの中。美雪はこうして理恵のかつての恋人尾上竜一と飲んでいる、何か因縁めいていてもっと理恵の話を知ろうと美雪はかなりのピッチでビールをお酌していた。尾上は酒に弱いのかまだ美雪が酔わないうちからポロポロと理恵との馴れ初めを話しはじめていた。

「それで、どうして理恵が一方的に婚約を破棄してきたのですか課長」

「オッ、奥本君直球でくるのか～こんな場合はカーブできてほしいな～アッハッハッ」

「もう、課長！」

「そうかそうか、さっきも言ったけど式の日取りもホテルも予約して、堀内取締役経理部長に媒酌人をお願いして承諾をいただいた夜理恵と二人で...」

「へえ～理恵と二人で！」

「たしか君は二十一だったな、チョットだけエッチな話しになるが、これは今流行りのセクハラでないことを信用してくれる？」

「もう！課長早く...」

「わかった。その夜理恵と二人で披露宴を予定していた京都ホテルのスイートルームに入ったんだけど、俺は当然あの可愛い顔だから処女だと思っていた。で結果は処女ではなかったんだけどそんな事は今時何にも問題がない、それで...」

「課長、それで...」

「それで、俺もまだ若かったからセックスには自信があり理恵の身体をおもいきり時間をかけて愛撫したら理恵はそれに応えて乱れるほど感じてくれた。あの部分に人指し指と中指でそとまさぐるとなんていうか～」と日本の指を二本揃えて懐かしそうに見ている。

「課長、もう～やらしい～」

「それで十分濡れていることを確認して、その～あの～アレを理恵の中に入れようとする理恵が」

「竜ちゃん、入れるの？」と聞くから俺は、

「理恵、もう婚約して式の日取りも決まっているのだからお願い入れさせて！」

「ううん、竜ちゃん、違うの～」と言いながら理恵の右手は竜一のペニスを人指し指と親指でつまみ上下させながら、

「竜ちゃん、もっと大きくしてから入れた方が...」

と理恵の一言で竜一のペニスは無惨にも毛の中に隠れるほど萎縮していた。竜一は、美雪の顔を真正面から見て「それから今日まで萎えたままでピクリともしなくなった」と泣きそうな顔で訴えていた。

「課長、そんなことがあったの...」

美雪はまだ大人の男性のペニスを見たこともなく、小さい大きいと言われてもピンとはこないが、尾上の背の高さ、会社のテニスクラブのコーチとして飛び回っている元気な身体からはとうてい小さいなどという言葉はどこを探しても見つからなかった。

「課長、お医者さまに行ったの？」

「恥を忍んで行ったら...」

「行ったら？」

「その先生、健康な時の勃起した状態で何センチあったと聞くので、昔冗談で計った時十二センチ五ミリだったというと、先生は日本人の勃起時平均は十二センチ、日本人の女性の膣の深さは平均で七センチ、つまり八センチもあれば性交も子供も産めるし結婚もできると言ってくれた」

「課長、良かったじゃないの、おめでとう」

美雪は家を出てから一年半ホームシックなのか、理恵やあや子以外にも気の会う女性社員とはスナックやカラオケに通い始めていた。酒は入社時よりも強くはなっていたが、今もトイレに立つ時は足と口が少しもつれ始めてきた。

「課長、お医者さまが小さくないって言われたのだから自信を持ちなさい」

「でも！俺、まったく起たないんだ！」

「そんなもん、若い綺麗な女性ができたらすぐ治りますわよ～課長～」

と、その時美雪のバックの中から今日買ったばかりの携帯電話が鳴っている。それは理恵からで、つい酔っていたのか、

「もしもし、もうお金もらったの？」と言ってしまった。

「美雪、何よその言い草は！」と理恵が怒っている。

「でも、本当のことでしょう理恵」と言ってしまったから前で聞いている尾上竜一はピクリとしている、さすが美雪も罰が悪かったのか、

「理恵、ごめん...」

「そんなこといいのよ美雪、それよりあんただいぶ飲んでるけど相手は誰なの？」

「そんなん教えないよ～」

「フラワーの人間だったら、今の話絶対問題よ、誰よ美雪」

「理恵、どうして超エリートの尾上課長を振ったの？課長さっき泣いていたよ～」

「えっ、まさか、尾上課長と！」

「そう、理恵の不始末を私が何とかすると約束していたの」

「美雪！私もあや子も人生の半分は失敗したけど、美雪だけはそうなってほしくないの、そんな男、一生の不幸よ！」

「理恵...だって...」といったきり電話を切っている。

ふら～ふら～と店を出た二人はタクシーを拾い、尾上が国道一七一のラブホテル街と告げた。部屋に入ったころには緊張のせい少し酔いが覚めた美雪の頭の中には結婚という文字が脳から小脳へ小脳から脳へとキャッチボールをしていた。竜一はフラワーのエリートコース経理部の課長、同期には課長も一人や二人はいるが経理部の課長は一ランクも二ランクも上と社内では位置づけられている。京都大学経済卒、スポーツマン、ハンサム、家柄財産収入とどんな意地の悪い品定めをしても美雪にはありあまると女が持って生まれた感性で考えていた。竜一のペニスの件もお医者さまの話が本当なら問題がないと思った瞬間、美雪は真っ裸になりバスタオルを身体に巻いて竜一の待っているバスルームに入っていった。竜一は驚きながあわてて前を隠しながら、

「美雪ちゃん、素敵だ～美雪ちゃんは着痩せするタイプだったの？」

「もう～課長、見ないでよ～恥ずかしいから～」

「ところで、本当に処女なの美雪ちゃんは？」

「ええ～まだ男の人とキスの経験もないの」

「今日は、付き合ってくれてありがとう～」

「ううん、課長、もし私が今日処女をささげたら今後も付き合ってくれます」

「な、何を言っているんだ。もしももしもだよ、今日上手くいったら結婚を申し込むのは僕の方だよ、でも...」

「大丈夫よ。でも今日は酔っているから、今日でなくってもこんな身体でよかったらいつでも協力させていただきます。課長～」

美雪ちゃん、と言うなり竜一は大きな身体で小さな美雪を折れるほど抱きしめてキスを求めてきた。美雪は素直にそれを受け止めていたが、なにせ初めてのキスで身体がブルブル震えている、それに感動した竜一はさらに口を桃色の豊満な乳首に這わせてきた。乳首をチュッチュッと吸われると美雪の腰が砕けてしゃがみこんでいた。そのしゃがみこむ一瞬竜一の股間に目を向けるとペニスは一人立ちして上を向いていた。

ベッドでは以前理恵を愛したように丁寧に丁寧に身体全体を口と指で愛撫している。美雪は乳首を吸われたり舌でころがされると、秘部の芯がジンときてそこを口で愛撫されたくなる。口が秘部に取りられると今度は乳首がさみしくキュンとなり、口でも手でもなんでもいいから早く愛撫してほしいと心の中で要求していた。それを感じてか竜一の口と舌、両手の十本の指が美雪の性感帯をいそがしく動きまわっていた。

竜一のペニスはさっきの話しがまったく嘘と思われるほどピン起ちになり、ころあいを見計らって静かに挿入していた。

「課長、治ったの？」

「うん、美雪ちゃん、ありがとう」

「おめでとう～」

「それでは美雪ちゃんの処女をいただきます～」という、竜一の分身は一センチ、また一センチと美雪の粘膜を傷つけないようにいたわりながらそろりそろりと侵入している。最後の処女膜の当たりを確認した竜一は「美雪ちゃん、結婚しよう」と言いながら腰に力をためて一気に突いた。

「ツッ～痛い.....課長、そのまま動かなで！」

「ごめん！しばらくこのままで...」という美雪の口を吸い、そして乳首を舌でころがすと美雪の下半身の力がス～と抜けたと同時にペニスがヌルッと無理なく入り、竜一の分身はせわしくピストンを始めてわずか一分で「ウッ」と竜一の口から声が漏れて三年ぶりに男を取り戻していた。

。

3話につづく～♪